

平成25年度

清水町いきいきふるさとづくり 寄附報告書



心の中に残る皆様のふるさとへの思い…

ふるさとからの便り



北海道清水町

初夏の候、町民の皆様、そして本町のまちづくりに関心をお持ちいただき、ふるさと納税によりご寄附をいただいた方々におかれましては、ますますご清祥のこととお慶び申し上げますとともに感謝申し上げます。

春先の天候は、真夏のような暑さが続いて雨も降らず心配していたところ、一転して長雨が続くなど、天候が不順であり、農作物への影響を懸念しておりますが、どうか天候回復を願い、豊穰の秋を迎えたいと願っております。

昨年、町民の力を結集し平成22年に誕生した「十勝清水牛玉ステーキ丼」が、7月に茅室町で開催された新・ご当地グルメグランプリ北海道2013において、念願のグランプリを獲得しました。グランプリ三度目の挑戦で、町民大応援団とともに悲願達成の喜びを爆発させたところでありました。

十勝千年の森において、一昨年に開催されたガーデンショウの後、「ローズフェスティバル」が盛大に開催され、2万人を超える入場者が訪れ、北海道ガーデン街道として道内外の観光客に広く認知されたものと認識しております。

さて、昨年私も四期目の町政を担わせていただくことになり、早速、小中学生の医療費無料化、預かり保育の充実、乳児の紙おむつ購入費助成、高齢者へのタクシー乗車券助成、住宅リフォーム・太陽光発電システム導入奨励金交付事業等々、子育ての環境の充実や、福祉におけるまちづくりなどの取り組みを進めさせていただきました。

本年も、まちづくり基本計画の「みんなで生き生き 豊かき育むまち とからしみず」に基づき各種施策を進めさせていただく所存であります。皆様方から寄せられました「いきいきふるさとづくり寄附」のふるさと納税により、特徴のある事業に活用させていただき、個性豊かな活力あるまちづくりに邁進してまいります。

平成25年度におきまして、皆様からいただいた寄附をここにご報告させていただきます。

なお、平成26年度より、魅力ある清水町の創造、発信を目的としまして、町外者の方に感謝を込めて特産品を贈呈いたします。詳しい内容が決まりましたら、あらためてご案内させていただきます。

皆様のご支援、ご厚情に心より感謝申し上げますとともに、皆様のご健勝とご多幸を祈念し、お礼のご挨拶といたします。

平成26年6月

清水町長 高 薄 渡



平成25年度 清水町の主な話題



4月、清水公園PG（パークゴルフ）場、町体育館前PG場、下佐幌PG場、御影PG場がオープンしました。オープン当日は肌寒い天候にもかかわらず、オープンを心待ちにしていたプレーヤーがたくさん来場し、久しぶりの感触を楽しんでいました。前日までに町体育館前と御影PG場では、町PG協会と御影PG同好会、清水町シルバー健康友の会の会員が枯葉拾い、OB杭や防護ネット、スタート台の設置等にご協力いただきました。

5月、清水町林業推進協議会主催の「2013しみずグリーンフェスティバル」が美蔓の町有林内で開催されました。今年はお子さんの誕生記念やご結婚記念による参加の他、ロータリークラブの会員やプリマハムの従業員など町民約80名が参加されました。参加者は、慣れないスコップを片手に力いっぱい掘り起こし、背丈の低い桜、シラカバ、ミズナラなどの苗木450本をそれぞれの思いを込めて丁寧に植樹しました。



6月、「第19回全十勝清水やきもの市」がイベント広場で開催されました。道内各地から46軒の窯元が出展し、個性豊かな茶わんや皿などが並べられ、多くの家族連れや陶芸愛好者が手にとってお気に入りの一品を探し求めていました。会場では、オリジナル作品が作れる陶芸体験コーナーや地元飲食店による販売も行われた他、ハーモニープラザでは清水高校茶道部と茶道清翠会による野だてコーナーも行われました。

7月、「新・ご当地グルメグランプリ北海道 in 十勝芽室」が芽室町で行われました。十勝初開催となった今回は、過去最多となる3万600人が訪れ、出展数も最多の15団体が自慢のご当地メニューを出品しました。今回で3回目の出展となる「十勝清水牛玉ステーキ丼」は2日間で5千768食を提供し、「人気度部門」「味部門」「コストパフォーマンス部門」の全てにおいて1位を獲得し、見事グランプリに輝きました。牛玉丼ブース前には開店前から行列ができ、途切れることなく牛玉丼を求めるお客さんで大盛況でした。



9月、清水町花火大会が有明運動公園で開催されました。18年ぶりに開催された花火大会は、町民有志がまちに活気を取り戻そうと実行委員会を設立し、企業や個人からの協賛により実現しました。小雨が降るあいにくの空模様でしたが、色とりどりの打上げ花火やハートマークなどの変わり種花火約2千発の大輪が披露され、フィナーレにはスターマインが夜空を彩り、会場に訪れた観客を魅了しました。



9月、清水秋まつりが行われました。突き抜けるような青空の中、大勢の担ぎ手と共にみこしが街中を練り歩きました。無病息災、厄除けの意味もあることから、獅子舞に頭をかんでもらう姿も見られたほか、多くの露店が軒を並べたイベント広場では、スマートボールや輪投げ、金魚すくいなどを楽しんだり、焼き鳥やクレープをほおぼる子ども達でにぎわいました。また、恒例のもちまきも、多くの方が参加していました。

10月、町内の小・中学校等の保護者、学校関係者、OB等を中心に組織されている「おやじの会」の連合組織、「おやじの会連合会」による秋の環境整備ボランティアが行われました。この日は、15名の協力により、施設の老朽化が進んでいる第二保育所の力になれればという思いから、テラスのモルタル補修や、靴箱の修理・ペンキ塗りなどの作業を分担して手際よく丁寧に行い、汗を流しながらきれいに仕上げました。



11月、清水小学校5年生と幼稚園、保育所の年長児との交流会「わくわくゲームランド」が小学校体育館で行われました。来春入学する年長児が、期待を胸に楽しく入学できるように、5年生と交流をしながら体験する今回の交流会は、5年生が趣向を凝らしたゲーム、コップタワーくずしや輪投げ、魚釣りゲーム等を準備して、年長児の手を引いて案内していました。

始めは緊張していた年長児も、ゲームが始まると時間を忘れて一緒に楽しみました。

12月、クリスマスお話会が図書館で行われました。この日は、読み手サークル五月会によるパネルシアター「あわてんぼうのサンタクロース」等が行われ、町内在住の洞内由紀子さんが自作の絵本「おにく」を披露した他、読み手キッズが「まどからおくりもの」「十二支のおはなし」を披露し、訪れた小学生や親子が楽しく話に聞き入っていました。また、全員にクリスマスプレゼントが手渡され、子どもたちはとても喜んでいました。



1月、全十勝チビッコアイスホッケー御影大会がアイスアリーナで開催されました。18日に行われた4年生以上のA級では、清水御影アイスホッケー少年団が、決勝で広陽稲田少年団を5対1で破り優勝を果たしました。また、清水御影少年団Bは惜しくも1回戦敗退となりましたが、スピード感あふれる熱い戦いを繰り広げました。19日に行われた3年生以下のC級では、清水御影少年団が準優勝を勝ち取りました。

2月、第53回町民書道展・第34回町民憲章書道展の表彰式が文化センターで行なわれました。今年、町民書道展の部が79点の中から46点の入賞、町民憲章書道展の部が120点の中から55点の入賞となりました。当日の表彰式では、熊谷陸男文化協会会長と木村正一町づくり推進協議会会長からそれぞれの入賞者にメダルが授与され、町民憲章の精神を持ち、明るく豊かな住みよいまちづくりを進めていただきたいと挨拶されました。



3月、第20回清水ジュニアブラスバンド定期演奏会が町文化センターで開催されました。アルトサクソフーンやクラリネット、チューバなどの楽器演奏による「あまちゃん」を始めとした10曲のハーモニーに、観客は大きな拍手を送っていました。演奏会中盤には、清水中学校と清水高校の吹奏楽部をゲストに迎え、コラボレーションによる演奏もあり、観客は息の合った音色を楽しみました。

清水町のあゆみ

北海道十勝平野の西部に位置する清水町――西には季節ごとに彩りを変える『日高山脈』の山々が、東には大雪山系トムラウシ岳から注ぐ『十勝川』が滔々と十勝平野を流れ、山岳と平野を流れる川、そして田園のコントラストが、北海道・十勝ならではの特徴ある景観を形成しています。

清水町の開拓は、第一国立銀行創設者である渋澤栄一子爵が熊牛地区に創設した十勝開墾合資会社によって始められました。明治 31 年 4 月に越前地方から入植した 26 戸 99 名を皮切りに、熊牛原野と呼ばれたこの地区に順次入植が進められました。その後百十年あまりが経過し、現在は、人口約 9,930 人、農業産出額約 185 億円を有する酪農と畑作を基幹産業とした町になっています。

開拓が進むとともに、次第に集落が形成されていき、明治 36 年には人舞村外一ヵ村戸長役場が設置されました。明治 40 年の農家戸数は 666 戸、1 戸あたりの耕地面積は 3.89ha となりました。現在と比べると 10 分の 1 ほどですが、主にキビや豆類、馬鈴薯、そばなどを生産し、特に当時の主食として消費されていたキビは、当時の村の人口 2,220 人に対し、2,600 人分の食糧に相当する量を生産していたそうです。

清水町の市街地に電灯が灯ったのは大正 8 年ですが、電力を供給する水力発電所の建設に対し、議会は当初「将来の水田造成に必要な水資源が不足する可能性がある」と反対の意思を示していました。この当時、住民の暮らしにはランプが明かりとして使われ、高い電気代を払ってまで電灯をつけなくても良いという時代でした。その後、大正 10 年には電話が開通しますが、役場や商工業者など、加入したのはわずか 82 戸で、一般世帯への普及はかなり後になってからでした。

昭和 31 年 10 月 1 日、御影村との合併により、3,079 世帯、17,945 人の「新」清水町が誕生しました。町村合併促進法は、人口 8,000 人未満の町村の行政の効率を高め、財政力を豊かにし、住民福祉の向上を図ることを目的に合併を進め、全国の 1 万近い自治体を 3 分の 1 に減らそうというものでした。当時人口は 5,335 人、戸数 856 戸の御影村はその対象となっており、「北海道町村合併促進審議会」などにより、御影村は清水町との合併を第 1 案として提示されていました。しかし、大正 10 年に芽室から分村した御影村は、清水町とは歴史的、経済的つながりは薄く、御影村民は合併反対派が多数を占めていました。十勝支庁の合併勧告、指導もあり様々な障壁を乗り越えての合併でした。

合併後の昭和 30～40 年代は、日本全体が高度成長の黎明期でもあり、住民の暮らしも便利で快適な様々な整備が進み、豊かさを実感できる基盤が整い始めた時期です。清水町でも、道路・橋梁、保育所や学校、公民館などの公共施設の新築改築などを進めました。

昭和 50～60 年代は各小学校の新築や清水町文化センター、日勝スキー場、町民水泳プール、老人福祉センターなどが建設され、現在の清水町の姿が形づくられた時代です。

平成 3 年に策定した「森と水の郷づくり基本構想」は、清水町のもっとも大きな財産である自然を大切に、森や水を守り育て、自然と人とのかかわり合いを深めながら、活力と潤いのある地域を創造することを基本理念にしています。

平成 18 年 4 月 1 日、清水町の町政運営について基本的な事項を定める「まちづくり基本条例」を施行しました。この条例の施行により「情報の提供と共有」を柱に「町民誰もが参加する協働のまちづくり」を推進し「町民憲章」が掲げる理想のまちをつくることを目標として町政運営を行っています。

また、平成 23 年度から平成 32 年度までを計画期間とした清水町まちづくり計画（第 5 期総合計画）では「みんなで生き生き 豊かさ育むまち とかちしみず」を将来像とし、町民みんなが参加し支え合い、活力と元気にあふれ、健康で安心して暮らせる豊かなまちを目指して、まちづくりを推進しているところであり、平成 25 年は、子育て支援施策の新設、拡充、保健福祉事業の充実に取り組みました。

寄附の概況

『清水町いきいきふるさとづくり寄附条例』の制定から 6 年目となる平成 25 年度は、16 名の方々から総額で 2,050,216 円の寄附をいただきました。

(1) アイスホッケーのまちづくり事業	7 件	1,210,000 円
(3) 次代を担う子どもたちの健全育成事業	3 件	115,216 円
(5) 指定なし	6 件	725,000 円
合計	16 件	2,050,216 円

※一度に複数の事業に対し寄附できるため、人数と件数の合計は一致しません。

また、開始からの累計額は以下のとおりです。

(1) 第九のまちづくり事業	7 件	574,000 円
(2) アイスホッケーのまちづくり事業	39 件	6,305,000 円
(3) 次代を担う子どもたちの健全育成事業	15 件	881,316 円
(4) 森と水・景観の保全事業	6 件	1,315,000 円
(5) 花で彩るまちづくり事業	7 件	252,158 円
(6) 指定なし	24 件	2,313,140 円
合計	98 件	11,640,614 円

なお、平成 25 年度は、いきいきふるさとづくり基金の取り崩しは行なっておりません。平成 27 年度には、第 8 回となる第九演奏会が開催される予定となっております。

寄附者の方々（敬称略・五十音順）

帯広信用金庫	清水支店・御影支店	40,000 円
小林 靖典	（東京都豊島区）	10,000 円
佐藤 賢一	（横浜市神奈川区）	200,000 円
佐藤 美知雄	（千葉県市川市）	100,000 円
清水小昭和 60 年、	清水中 63 年卒業同期会	25,216 円
須賀 洋子	（札幌市中央区）	50,000 円
杉森 四郎	（埼玉県蓮田市）	100,000 円
冨田 都	（愛知県春日井市）	20,000 円
原 幸一郎	（大阪府堺市）	600,000 円
原 正子	（大阪府堺市）	150,000 円
原 周平	（東京都渋谷区）	200,000 円
原 拓平	（東京都渋谷区）	150,000 円
原 有佳里	（大阪府堺市）	50,000 円
原 英子	（神戸市垂水区）	50,000 円
牧野 俊信	（北海道釧路市）	300,000 円
寄附者 1		5,000 円
合計	16 名	2,050,216 円

※氏名等、個人情報の掲載については、本人の了承を得ています。
掲載を望まない方は匿名としています。



清水市街



御影市街

清水町いきいきふるさとづくり寄附

清水町の文化芸術活動は、大正時代まで遡り、多くの団体やサークルが多種多様な活動が続けてきましたが、その集大成が、昭和55年の清水町文化センターのこけら落としとして開催された「第九演奏会」と言えるでしょう。町民204人の合唱は、全国に「第九のまちしみず」としてその名が広く知られるようになりました。それ以来、5年ごとに開催されており、また平成14年に開町100年を記念して開催された「第九フェスティバル」では幼稚園から全小・中学校、高校、社会人の参加団体、全員が原語による合唱を行うなど、「文化のまち」をキーワードとしてまちづくりを進めております。



町民の文化に対する情熱とエネルギーは、昭和55年から約30年を経過してもなお連綿と受け継がれ、平成22年12月5日には第7回となる演奏会が開催されました。

本町の特徴的なまちづくりとしてのアイスホッケーは、昭和7年、御影小学校の教師だった加藤光也氏が池をスケートリンクにして、子どもたちに教えたのが始まりといわれています。

昭和13年には御影小学校の先生を集めてアイスホッケーのチームをつくり帯広大会に遠征するまでになりましたが、戦争の時代に入り一時期立ち消えとなりました。昭和24年、加藤先生は御影中学校の校長として赴任し、グラウンドに陸リンクをつくり再びアイスホッケーの活動が始まりました。



平成4年、町村では全国初めての屋内リンク「清水町アイスアリーナ」を建設し、清水高校アイスホッケー部は平成17年インターハイで準優勝、平成20年北海道高等学校アイスホッケー選手権大会で優勝を果たすなど、「アイスホッケーの町清水」を全国に発信しています。

また、まちづくりの基軸のひとつとして「教育」があり、本町は一人ひとりが、いきいきと輝く創造性豊かなまちづくりを推進しています。

次代を担う子どもたちが、健やかで伸び伸びとたくましく生きる力を育む環境を整備するとともに、一人ひとりの町民が心豊かに生きがいを持ち充実した生活を送るための学習環境や活躍の場の拡充に努め、創造性豊かな地域社会の実現を目指した人づくりを進めています。

全国に先駆け平成15年5月に、構造改革特区で「文化のまちの心の教育特区」が認められ、町単費による教員を配置し小学校1～2年生を1学級20人程度の少人数学級を実施しています。

いきいき輝く人づくりを理念とする少人数学級は、個に応じたきめ細やかな指導の充実により子供たちの学ぶ意欲は向上し、集団の中で個性を伸ばし、自分を見つめ直し、感情をコントロールして他者との関係を調整することのできる秩序感覚の育成など様々な教育的効果が成果として上がってきております。

平成18年4月に「しみず教育の四季」を宣言し、厳しくも美しい本町の四季を通じて、家庭、学校、地域が相互に連携し、新しい時代をきり拓く子どもたちを、家庭、学校、地域が「12の窓」から心を合わせて守り育てることによって、教育への関心を高め、それぞれがかかわり何ができるのかを考えて行動する取り組みを進めています。

これらの本町がこれまで取り組んできた様々な施策について、町民や清水町出身者、本町にゆかりのある方が、寄附という行為によりまちづくりに参画し、寄附者の意向が反映された事業を推進することで、第九演奏会やアイスホッケーをはじめとする特色あるまちづくりを更に進めたいと考えております。

また、ふるさと納税制度が実施されたことにより、寄附条例を制定し、本町の特色を政策メニューで示すことで、寄附の意向を持つ方に対するアピールができ、寄附金は地方交付税の減少など逼迫する財政状況の中、新たな財源としてまちづくりへの展開が図られるものと考えています。

清水町まちづくり計画の位置付けについては、寄附金による事業の実施が町民参加の促進や、健全な財政運営の一助となる視点から、第5編「みんなで創る協働のまちづくり」第1章「町民誰もが参加する協働のまちづくり」の中の施策として「一人ひとりがお互いに尊重し、それぞれの立場で自主的にまちづくりに参加します。(町民)」と記載されております。

また、町内の商店等20箇所のご協力をいただき、寄附された方が協賛店で買い物などの際に特典が受けられる「ふるさと応援会員」事業を行っておりますが、平成26年度には、新たに感謝の意を込めまして本町の魅力のある特産品を贈呈いたします。

いきいきふるさとづくり寄附では、政策メニューとして5つの事業を掲げておりますが、皆様より寄附を受けるためには、寄附を受けるにふさわしい行政運営が求められるものであり、本町の人材や自然、地域が醸し出す雰囲気など魅力を高める継続的な努力を続け、多くの方が暮らしてみたいと思う清水町づくりを進めたいと思っております。

今後のまちづくりにおいても、それぞれが基軸のひとつとして重要な施策であり、寄附をいただくことによって、寄附者が事業に関わることとなり事業実施者(町民等)との連帯感の醸成を図って行きたいと考えています。



基金を活用して行う事業

積み立てた基金は、寄附者の指定する次の事業に活用されます。



(1) 第九のまちづくり事業

1980年に清水町文化センターのこけら落としとして開催した「第九演奏会」以来、第九を本町のまちづくりの基軸のひとつとして、関連する様々な事業を行っています。

演奏会や合唱祭の開催、からくり時計の維持など、第九に関連する事業に活用します。

●「歓喜」の歌声（清水町史から抜粋）

演奏会は管弦楽が札幌交響楽団、指揮、大町陽一郎の手で行われ、最終楽章の歓喜の大合唱に204人の町民合唱団が参加した。牛飼いの酪農家の主婦から、トラクターを操る若者、平凡な〇しから勤め帰りのサラリーマンまで、「第九を歌いたい」というただその目的だけで集まった団員たちは、難解なドイツ語の歌詞に悪戦苦闘しながら練習を積み重ね、ついに清水町の名を“第九の町”として全国に轟かせた。以来、演奏会は五年に一度開かれ、そのつど集まった団員によって歌い継がれている。（中略）

こうして多くの人々に感動を与えてきた“歓喜の歌声”は一人の男の夢から始まった。その男の名は高橋亮仁という。昭和34年、清水高校の音楽教師だった高橋は三人の卒業生に請われて仲間だけの小さな合唱サークル「せせらぎ合唱団」をつくった。練習を重ね、演奏活動を続けているうちに合唱団はやがて大きく成長、メンバーも町内だけでなく、新得、鹿追、芽室、帯広などに広がっていった。（中略）

メンバーの夢はやがて「自分たちの手でベートーベンの第九番、歓喜の歌を合唱したい」と大きくふくらんだ。当初は人間より牛の方が多いた小さな町で第九を歌う合唱団などできるわけがないと一笑に付されたが、参加を希望する団員が一人、二人と増えるうちに夢は大きく実現に近づいた。

高橋らの熱意に町も全面的に協力、こうして実現したのが「文化センター」のこけら落としでの「第九」公演だった。その栄誉をたたえて昭和56年度の「北海道文化奨励賞」がせせらぎ合唱団に贈られた。



(2) アイスホッケーのまちづくり事業

アイスホッケーによる青少年の育成や異世代の交流は、本町のまちづくりの特徴です。幼児、小中学生、高校生、一般のチームの育成強化や各種大会の開催、出場への支援などに活用します。



(3) 次代を担う子どもたちの健全育成事業

子どもたちが心身ともにいきいきと学び、遊べる環境づくりや、地域全体で育てていく環境づくりを行います。

具体的には、少人数学級の推進、児童図書の充実、放課後子どもプランの実践、地域の見守り活動の支援、子育て支援事業の充実などに活用します。



(4) 森と水・景観の保全事業

日本の食糧基地である十勝・清水町での安全で安心な農業の推進や、本町の森やきれいな水を守る活動を行います。

レクリエーションの森の整備、きれいな水を守る環境の保全、クリーン農業や安全・安心な農業の推進、桜並木や農村風景の維持保存、町内の遺産的価値のあるもの（しみず遺産）の発掘と維持保全などの活用を想定しています。

●森やきれいな水を守る活動

清水町の基幹産業である農業には、きれいな水が欠かせません。また、きれいな水は豊かな森で育まれます。

清水町では、きれいな水や豊かな森を次の世代へ引き継ぐため、環境保全の取り組みを進めています。その一つの「しみずグリーンフェスティバル」では、平成17年からスキー場跡地の原野に森を甦らせるための植樹活動が、町民の皆さんの手によって行われています。



(5) 花で彩るまちづくり事業

町内を花で飾り、来町する方々へのおもてなしの心を表現します。

具体的には、シーニックバイウェイ「十勝平野・山麓ルート」沿線への植栽や、町内各所の花壇の整備、公共空間への植栽などに活用します。

●シーニックバイウェイとは

シーニックバイウェイ(Scenic Byway)とは、景観・シーン(Scene)の形容詞シーニック(Scenic)と、わき道・より道を意味するバイウェイ(Byway)を組み合わせた言葉です。地域と行政が連携し、景観や自然環境に配慮し、地域の魅力を道でつなぎながら個性的な地域、美しい環境づくりを目指す施策です。

(出典：シーニックバイウェイ支援センター <http://www.scenicbyway.jp/>)

現在、清水町を含む「十勝平野・山麓ルート」がルートとして指定されており、沿線の各地域では、住民などの手で花壇の整備や清掃活動など「美しい景観づくり」の活動が行われています。

〒089-0192

北海道上川郡清水町南4条2丁目2番地

清水町役場企画課統計企画係

TEL 0156-62-2114

FAX 0156-62-5116

e-mail kikaku2@town.shimizu.hokkaido.jp